

部分事象から見た日英語の単文構造

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2014年9月30日受付、2014年11月6日受理)

概要

英語（日本語）の基本構造が SVO(SOV)であり、それを少し拡張する単文構造として SVOP(SOPV)が位置づけられることを主張する。この OP が部分事象を表すことを示すと同時に、この分析により、日英語の文構造を二層構造と見ることによりよく理解することができるようになることを示す。S は文の題目であるが、目的語 O は OP の表す部分事象の中で題目であり、P がその述部となることを指摘する。目的語に題目性があることから、目的語の意味的役割の二重性が理解できると共に、ルート位置の斜格形は常に文内の他の要素に対する述部として働くだけであるという認識も得られる。具体的には、この部分事象分析により、英語の "provide A with B" の構造理解に何が重要か、また、日英語の受動、使役、受益などの文構成の原理や、さらに英語の中間構文の捉え方、日本語における複合動詞やサ変動詞の働きの原理などを見ることができるようになることを示す。

＜全体に亘る断り書き＞

- * 英語の例文については、筆者作例の断りがない場合、参考文献で挙げた3つの辞書から引用
- * 「事象」という言葉は「事態」に置き換えたほうがよいと思うが、「事象」で通す
- * BE、GO、HAVE は be、go、have を意味する抽象化した記号として使用
- * 文型の中の P は predicate（述部）を意味する記号として使用

[1] 部分事象の存在とその役割

次の各例文が表す事象全体を全体事象と呼べば、それら全体事象の中に、目的語とその後の要素とで構成される事象が存在し、これを部分事象と呼ぶことにする。このとき、動詞 V だけでは文の表す全体事象がすべて表現されるわけではないが、V が全体のあり方を規定するということで、動詞 V が全体事象を表す、と表現することにする。

私は彼をすごいと考える。

私はそれを棚に置いた。

Sheep provide us with wool.

羊は羊毛を供給する。

The shock robbed him of speech.

ショックで口がきけなかった。

(a) 部分事象の存在

文の中において、ある語に対し、それと結び付きが強い語が存在する。ここでは O と他の語との結び付きの強さに着目する。すると、動詞 V により事象全体が捉えられ、その中で O と他の要素とで指定される部分事象が多く存在することが分かる。それが単文の枠内で表現されるのだが、そこに何か原理的なものを見出すことができそうに思われ、特に我々日本人にとって理解し難い英語の構文（文型）にこの分析視点を適用したのが本考察である。

"Provide" と「提供する」、"rob" と「開放する」の違いが上の例で明らかである。これが、筆者が取り組むことになったこの研究の始まりである。これらの日英語の違いを理解することはどう考えても当初、無理であった。しかし、これらの文の対比から、O とその後の要素とが結合しているのではないかと考え始め、そこからここに至ることとなった。

「物を奪う」、「物を投げる」、「物を置く」などの全体事象の中で、当然のことながらそれぞれ「何から」、「どこへ」、「どこに」を指定したいと思うのが自然であり、それらを簡潔な形（単文構造）で全体事象の中に組み込んで表現できれば便利である。これが単文構造内の部分事象の役割・意義と考えられる。この部分事象は、全体事象が異なれば、それに付随する様々異なった部分を指定する必要があるが、その部分は全体事象のあり方が決定するものである。単文の中の部分事象を考える上でポイントとなるのは、部分事象を形成する要素が文型的、構造的には動詞 V に連結しているが、意味的には動詞 V とは独立し、要素間で連結している、ということである。これは後で扱う品詞の塊ということと、ルート位置の斜格形の働きを理解することと関係しており、このことは後で詳しく見ることにする。

(b) 日英語での文型の違い

日英語共に、他動詞文においてはルート位置の斜格形などが、副詞だけでなく、目的語（対格名詞）に対する叙述部にもなり得る、というのが筆者が認識を新たにしたところである。この場合、この斜格形は副詞とみなすことはできない。筆者が英文において難解に感じていた原因がそこであった。例えば、先の例文や次の追加例文で

Sheep provide us with wool. (us = A, wool = B)

The salesman sold me on these shoes. (me = A, these shoes = B)

セールスマンは私にこの靴を買わせた。

目的語 A を日本語では対格として訳ができない。だから、A は与格的に扱うことになってしまう。そのため、英語においても A を与格的なものと考えてしまう。with B の部分に着目すると、A with B という意味的塊が名詞の塊を形成していないことは明らかであるが、文型的、構造的には with B は V と関係していることが問題の根源である。即ち V には主語、目的語そしてこの場合、with B も連結しているが、意味的には with B は O としか関連付けようがない。V に関連付ければ副詞的で V の動作が B と近接(with)ということであり、B はその前の S provide A 全体に係わるものと考えられなくもない。すると、次の文が理解できない。

The shock robbed him of speech.

provide と rob は意味がほぼ逆であり、rob 人 with 物でもよさそうであるが、with の逆の意味の of が使用されている。したがって with B も、of B も O と意味的に強く関連させざるを得ないという結論に至る。そうすると必然的にこの意味的結合体が、事象の観点からは行為 V の結果の表示になっていると考えられる。Provide の場合は、目的語に対し with による近接、rob の場合は of による分離が結合していて、この意味的結合体に部分事象が認められるというのが筆者の部分事象分析の根拠である。すると

The sight filled my heart with anger.

その光景を見て怒りがこみ上げた。

で、われわれ日本人は訳から分かるように、with 物を副詞的に捉えようとするが、provide の文と同じように理解することもできることが分かる。これは次のことと関係していると思われる。それは fill の場合は O だけで文が成立するが、provide の場合は無理である、という違いである。

* provide 場所

Fill 場所

これは単に我々人間のそれぞれの全体事象に対する認識、捉え方の違いを反映するだけであり、全体・部分の分析に矛盾するものではないと考える。Fill の場合は、それにうまく対応する日本語が存在するので、with 句を副詞的に捉えられるが、英語ではこれは provide A with B と同じなのかも知れない。恐らくは、provide A with B (rob A of B) における用法と完全に副詞的な用法とを両端とする中間段階の用法が連続的に存在していると推測される。Fill の例では、恐らく両方の意味を含んでいると考えられる。

wipe one hand on a towel

タオルで手を拭く

(c) OP 部分事象の品詞性

ここで部分事象とは何かを明らかにしておくことにする。たとえば

a flying object

であれば、

an object BE flying

のように、flying と object の間に主述の関係が成立すると言えるが、これとここで言う部分事象との違いは

何であろうか。" flying object " は全体が名詞となっており、文の中でこの塊はある対象を指示している。然るに、ここでの部分事象は O と P で 1 つの品詞を形成していないことが決定的に異なる。O と P は、動詞 V に構造的に連結しているだけで、OP が 1 つの名詞や形容詞、副詞などと理解できない。OP が 1 つの品詞を形成していないことから、間接的に O と P が V に構造上、強く連結しているともいえよう。

部分事象が仮に 1 つの品詞の塊であればどういうことになるか、確認しよう。もし、名詞の塊であれば、これは表現しようとしている事象の中でものか概念などを指示することになり、この指示自体に主張性は考えられない。この名詞結合体の中に主題・陳述の事象性が認められないということで、全体事象の中の 1 つの名詞要素に過ぎない。もし、副詞的な塊とすれば、この塊自体にも主張性がない。動詞との結合では主張性が出てくるけれども、それに反して、ここで言う部分事象 OP は、1 つの品詞を形成しておらず、全体事象に付随する形で関連する事象が主張性を持って存在することを述べるものである。

それでは、O と P との結び付きはどんなものなのか。文全体が描写しようとしている全体事象の中で、それに付随する部分事象を表している、ということである。動詞によっては、部分事象を述べるできない場合や、述べる必要がない場合など多様であり、次のように整理して述べることができよう。

SVO、SOV という構造に対し、SVOP、SOPV では、OP 部分事象を文全体が表す全体事象とともに表現することができる簡潔な手段として、日英語ともに部分事象表現を単文形式の枠内に用意されている。

言語発生的には、恐らく、ある事象に対し、それを表現する動詞を作り出し、その事象に必要な動詞の項を指定する形で文型が定着してきたと思われる。使用の過程で、意識に上らない形で法則的なものが入り込んでくる。その一つが全体事象と部分事象の二層構造ということであろう。人間が最初から意図したものはなかろうが、人間の認知が基になって文作成のコストの面などから、全体事象・部分事象の二層構造が定着したと考えられる。

(d) ルート位置での斜格形の働き

文のルート位置においては、副詞的用法を除くと「に」格はそれだけでは成立しない格で、常に直格（主格、対格）の存在を前提としている。ただし、それは他動詞の場合で、自動詞の場合は対格がないので主格に対応するだけである。つまり、筆者は主格、対格、与格、奪格などを卓立(prominence)以外では対等のものと考えていたが、部分事象の考察から、主格、対格とそれ以外の格（斜格）には決定的な違いが存在する、という認識に至った。

先の例で言うと、A は場所を表す与格のように見えるが、実は対格の扱いではなかろうか、ということである。このことが、部分事象とどう関係しているのか。V が他動性の性格が強く、かつ斜格が後に現れれば、それは O に対する叙述部になり、それらが部分事象を形成する可能性がある。他動性が強くても、give の二重目的語構文の間接目的語のように、O が対格であると考え難い場合があるように思われる。その例では、" give B A " で B の後に A が続くことにより B の意味役割が確定する。この B はどう分析できるのか。A が直接目的語であり、B は間接目的語といわれていて、筆者は意味的には " to B " と同じであると考えてきた。その後に A の直接目的語が来ているからである。ここに大きな落とし穴があるのではないかと今は考えている。2 つの授受構文に訳をしようとすると同じ訳になってしまうことから分かるように、我々は 2 つの授受構文を同一視しているのではないか。ここで、部分事象の考えを適用すると、

1. A GO to B

2. B HAVE A

となり、違いが見えてくる。1 の部分事象は「もの」の移動を述べていることから経過を示す事象と考えられるが、2 は所有の状態記述となっていることから結果的な所有状態に焦点が置かれていると推測されるが、それは間違っているように思われる。ここで特に重要なことは 2 の B が間接目的語と名づけられていて、" to B " と同じように機能していると思えるが、大きな違いがあることに今回気づいた。それは、" to B " のほうは斜格であり A の述部になっているが、2 の B は部分事象の中で題目として機能し、その後に A が述部として続くということ。したがって、give の例から言えることは、部分事象としては「O+斜格」の形と「O+名詞」とがありうるということである。目的語は動作の及ぶ場所・位置を示すこともでき、ここの目的語も対格の性格を持っていると考えるべきではないか。すると、provide A with B や rob A of B の A も日本語訳に惑わされずに考えると、対格としての理解が可能であり、そして、それに対する述部が with B や of B であるという認識が得られる。これが我々日本人にとってきわめて重要であると判断される。なぜなら、このように考えることによってのみ（間接目的語を対格と考えることによってのみ）、その後の斜格形との結合で部分事

象が形成されると理解できるからである。与格に対する叙述は考えられないからである。

Provide や rob --- 結果に焦点

Fill や hit --- 過程全体の関与が大

この対格と斜格の結合は、1文の中では(列挙の場合は除き)、1つだけ許される、と考えられる。つまり、ここで、Oに係わる部分事象というのは、「O+斜格」などの表す部分事象ということになる。

それでは、次はどうであろうか

(He) hit a nail with a hammer

The sight filled my heart with anger.

この事象を考えてみると、with a hammer は He とも hit とも a nail とも密接に関係している。どれと最も意味的な関連性が強いと考えてみよう。

It --- with a hammer

この結合は結果状態を表しているとは考えられない。全体事象の中で hit と with a hammer は密接に関係していて、しかも同じ状態で変化しない。従って、with a hammer は動詞との関係が強く、副詞的な働きが強いといえる。これは provide の例文と似た構造に見えるが、意味の上から考えると異なっていることが分かる。この違いは、当然のことながら、動詞 V で表そうとしている全体の事象の性格から来るものである。provide 文と比べると、この文は全く同じ品詞的構成でありながら、意味的状况は異っていることを示している。これらの文の日本語訳との比較から、日本語訳では対応する品詞的構成がまたそれら英文と異なることも分かってくる。With a hammer と with anger は同じ形であるが、異なった意味的役割を果たしていて、前者では道具の記述、後者では結果状態の記述となっている。このことから、日本人にとっては、日本語で訳し難いような文においては、部分事象分析などを使い、その原因を突き止め確認することが重要ではないかという教訓が得られる。ここでは provide の文は SVOP の性格が強いことが確認でき、このタイプの文についてこれから後で見ていくことにする。

(e) provide 文、wipe 文

英語は意味的に対格と与格が一致するように見える場合がある。Provide A with B の場合の A を我々日本人はどうしても与格的に見てしまっていたが、どうも対格ではないか、ということのをすでに述べた。この表現方法が日本語にはないからそう考えていたのだろうが、fill などでは移動物ではなく、変化の終点に着目することになるのだが、これは日英語で共通である。

The sight filled my heart with anger.

ここでの仮説は、日英語共に、意味的与格は常に対格形の存在を前提とする。これが正しいとすると、provide A の A は対格で、その後、先の例では斜格形の叙述が続くが、この組み合わせが日本語に存在しないので、別の構造で理解しようとする。Provide A with B の文の A が提供先を示す場所的な対照であるが、「～に」に対応させざるを得ないということで、どうしても与格的に理解しようとしてしまう。しかし、例えば fill では

Fill A with B

日本語は A に「～を」を対応させることができる。つまり、provide も fill と同じように A を対格と考えればよいのであるが、日本語では扱いが異なってしまう。PROVIDE 文で with B に「～を」を対応させるけれども、fill の場合の with B と同じに考えればよい。同じように考えると、英語の二重目的語構文の間接目的語のほうも対格と理解することが考えられるということになる。Provide A with B と同じ形の日本語が存在しない理由を突き止めることは興味あることであろうが、ここでは、それは問わない。いずれにせよ、ここで述べたことは筆者にとって大きな発見である。ただ、provide は give の形の2つの構文と共にこの構文も有していて、多様な構文で使用できることから、英語のほうが日本語より多くの構文を使用可能であると言える。

[2] 日英語の目的語を題目とする部分事象

単文の中で目的語に対する叙述というのは、主語についての叙述とどう違うのか、この点をまず確認しておく。動詞 V による全体事象の記述の中で OP 部分が部分事象を示す。この場合、OP の中で O を話者が主格として据え直すことはしていないと主張したい。この点が、今回筆者が気づいた最も大きなポイントである。O は V に対する対格の目的語であり、同時に「O に関して P である」ということであるが、その際 O は

対格のままである。そうすると、目的語 O は SVOP では動詞 V の作用を受ける対象であり、かつ、OP 部分事象の中で叙述がなされるところの主題の役割も果たすことになるが、主格に捉え直しされることはない。筆者は、部分事象の中で主題は主格でないといけなく、と考えていたが、これは文の主題と同様に考えていたもので、形が対格のままであることや、言語使用時の意識からも主格への捉え直しなど行っていないことがわかる。他動詞文において、S についての部分事象もごく少数存在するけれども、SVO の拡張として単文形式のままで部分事象を追加する場合、SVOP が圧倒的な頻度で存在しているということができる。S と P で部分事象を形成するのは主格補語と同格構造ぐらいであろう。元々、S は文全体の主題の役割を果たして叙述される側であることが大きな要因と思われる。この点が目的語 O と決定的に異なる。目的語 O は動詞 V の影響を受け、その影響の仕方や結果などを追加したい要求が生じる。従って、単文中での部分事象の実質的な追加記述という点からは、目的語に対する付加ということの必然性がはっきりと見えてくる。これらのことをさらに詳しく見てみよう。

(a) 目的語の特異性：2つの意味的結合

<英語の SVOP>

英語 SVOP の P は、前置詞句や形容詞句などの場合が多いが、その場合

O BE P、O GO P、O HAVE P、O ϕ P

の関係に絞られることを筆者はかなり以前から気づいていたが、そのことは次のように考えれば当然とも思える。それは動詞 V により全体事象が示され、その部分事象が最小限の語で追加記述される、と考えられるからである。そのためには、全体事象の中で、V の性格から予期される部分事象が追加記述されることになる。部分事象は全体事象に密接に関連していなければならず、従って、文の中の語に対する叙述が一番簡単な追加形式になる。筆者が覚えているだけでも、これまで小節(small clause)の単文形式への変換や SVOC 文の構造分析といった形では、単文内の部分事象辺りに注目が置かれたことはある。また、使役構文の分析においてもそうである。しかし、例えば単純な put の文に対して、そのような分析がなされることはなかった。その理由は、動詞が項を持っていて(二項動詞、三項動詞など)各項が埋まれば(満たされれば)全体の意味が確定する、という見方や考え方であったからだろう。ただ、次の put の文では、

She put me on the next train.

彼女は私を次の列車に乗せてくれた。

"on the next train" が put に対して意味的に必須の項目であり、put で表現しようとする事象に不可欠な要素ということは指摘されていた。部分事象を構成する各項が動詞 V と連結していて、そのことが部分事象の存在に我々が気づくのを妨げていると思われる。動詞に対し、表現しようとする事象を表すのに必要なすべての項を埋めれば意味的に、また用法的に全く問題がないが、そういった文の使い方の中で我々は部分事象の存在を無意識のうちに把握している、ということが今回の筆者の主張点の1つである。単文で表される典型的な文型は SVO であると言われ、そしてそのことに筆者も異論はないが、SVOP の形の単文形式も極めて多く、これら2つを英語の基本構造と認識すべきであろう。

目的語 O は原則、動詞からの作用を受けるもので、SVO に単文の形でさらに情報を追加して述べるのが OP の役割といえる。主語については、文全体の主題であると共に動作主の役割であり、文の残りがそれについての叙述になっているので、目的語 O は主語に対する叙述の一部分である。目的語 O に関する部分事象の形で情報付加がなされれば、表現内容が大きく増加することになる。英語では目的語 O は文の題目に成り難いが、部分事象の中では必ず題目の役割を果たしている。したがって SVOP の文を、動詞 V についての項を単に埋めることと見るのか、それとも全体、部分の二層構造から成り立っていると見るのか、これで文の構造理解が大きく変わることを主張したい。辞書による動詞の説明においては、単に項がどれだけあり、どのように埋められるか、を示すだけでよいが、言語分析においてはそれでは不十分と言わざるを得ない。

言語の典型的な構造が SVO、SOV というだけでは日英語の間の違いが表面化しないが、目的語 O についての部分事象を組み込もうとすると必然的に SVOP、SOPV となり、ここで日英語で OP への制約というような形で違いが生じる。S ではなく O に対する叙述という形で部分事象が述べられ、この部分事象にどのような特徴があるのか、という理解が重要となる。筆者は、英語での OP (部分事象) 付加の許容度が日本語よりも大きいと経験的に理解している。このように O に対しては2つの意味役割が生じるのであるが、それらの元になっているのは動詞 V の性格であるが、結論を言えば、日本語では<主題-陳述>の2つが同方向に同時に文末で確定され、英語では逆方向に時間差を置いて生じるので英語の方が許容度が高くなる、と考え

られる。

部分事象の中で目的語のみが叙述の対象となり得る、という認識を得たことは筆者にとって今回の重要な認識の1つである。逆に言えば、動詞 V に連結した斜格形や形容詞の要素については、それについて叙述がなされることはなく、常に叙述する側にあり、主語と目的語のみが叙述される側にある。また、OP の P が名詞の場合もあるが、これに対しても叙述がなされることはない！このことは、目的語 O のみが主語の位置に移動され受動文が形成されることとも関係していると考えられる（群動詞の場合は別）。

She put me on the next train.

I was put on the next train.

先に触れたように、主語と目的語に対して部分事象の叙述がなされ得るが、その叙述部は名詞や副詞や形容詞や前置詞句でも構わない。そして、それらの叙述部に現れる前置詞は、自動詞文や他動詞文の中で現れる叙述部に現れる副詞的なものと同じ形である！このことは注意する必要がある。英語で斜格などが文末の位置にあるとき、どう文型的に捉えるべきか、何に関連させるべきかを判断しなければならないからである。SVOX の形であれば、意味的な結合の可能性を考えてみると

S-X, V-X, O-X

であるがいずれもあり得る、ということである。特に、V-X 結合で X が副詞的な働きなのか、OP 部分事象の P なのか、という点が分かり難い場合が生じる。もう1つの問題は、VX と OX とが排他的に存在するのではなく、多様な事象が存在する中では、文型の数が限られていることから、事象の中ではどの程度の割合で一方が他方より強いのか、弱いのかといった判断しかできない両方の結合関係を持った事象も生じる可能性がある、ということである。

He wiped his hand across his forehead.

彼は手で額（の汗）をぬぐった。

Sheep provide us with wool.

羊は羊毛を供給する。

この例で言えば、SVOP の文型である可能性が相当強いと判断される。日本人にとって provide や wipe など特殊と感じられる文は、目的語に対する叙述が後続する形の SVOP 文型がほとんどであり、その際、英語の文型が日本語の文型にうまく対応しないことがその原因と筆者は理解するようになった。何が対応を阻止しているのかという点で provide と wipe では違いがあることが上の例からも分かる。すでに触れたように、日英語でこのような違いが出てくるのは OP と V の位置関係に最大の原因があると思われる。

以上は次のように簡単な形にまとめられる。SVOX、SOXV 構造において

- | | |
|-----------|-----------------------|
| ①被叙述専用の項 | — 主語 |
| ②叙述専用の項 | — ルート位置の斜格形、形容詞、副詞、名詞 |
| ③叙述兼被叙述の項 | — 目的語 |

(b) 目的語の2つの意味役割と文の二層構造

先に触れたように、名詞に対する叙述に関して、その名詞は主格でなければならないと筆者は考えていた。それは、通常、主語が題目となり残りがその述部になっているからである。しかし、部分事象に着目し、目的語に対してもその述部が後に続くということを理解することとなり、目的語も部分事象の中で対格のまま題目となり得る、という考えに至った。目的語の場合、これが OP 部分事象の中での題目として機能する場合でも、目的語が主格の性格を取得し題目となる、と考える必要がない、ということである。これが筆者が到達した認識である。したがって、主語と目的語だけが、文の中のルートの位置で、全体事象の記述の中で叙述がなされるところの題目項となり得る、とまとめられる。そうすると、前置詞付き与格などは、叙述されることが決してない要素であり、常に述部として機能するだけである、ということになる。このように、目的語は動詞 V に対しては動作を受けるものとしての意味役割を常に担うが、同時に部分事象の中では題目という意味役割を担うことになる。その2つの意味役割の決定が、動詞 V の位置の関係から、英語では時間差をもって V の両側でなされるが、日本語では同一方向に文末の V でもって同時になされるところに日英語での O の振る舞いの差異が生じる原因がある、と考えられる。

<OP 結合の不変性>

SVOP の V と O との意味関係は文によって様々なものが存在していることが分かる。例えば、二重目的語構文 SVOiOd では Oi は間接目的語と呼ばれ、場所的意味がある。make の使役文では、O は作用 V の及ぶ対

象を指定する側面が非常に強い。したがって、次のように言うことができよう。SVOPにおいて、OPが部分事象を表すことに拘れば拘るほどVとOの関係は広くなる、と言える。OPは全体事象の中で部分事象を表す働きをしていることが一貫しているが、そのためにOがVから作用を受けるものとしての条件でも多様性が広がる、ということである。使役文では、OPのPを除いては、文の意味が大きく変わってしまう。OPの内部関係については、次のようになる。

SVOP：OPの関係 ①BE ②GO ③HAVE ④φ

①、②、③、④に対応する動詞をグループ化し、特徴付けすることは可能であろうが、それらが同一のSVOPという形にまとめられていることにも意味があるともいえる。それはSVOという形が様々な事象タイプを1つにまとめた形になっているのと同じである。様々な異なる事象タイプであっても、同一のメカニズムで意味が理解できるからである。

日本語のほうも同じようにSOPVという形に集約されていると見ることができる。OPの部分事象を成立させるために、Vのところを V_1V_2 に複合動詞化させ、 V_2 をOPに対応させる仕組みを作り上げている。部分事象を簡潔な形で単文の中に、しかも同一のSOPVの形で盛り込むことは大きな利点と考えられる。それに伴い、 V_1 から見れば必然的に、目的語Oの意味役割が飛躍的に広がっていくことになる。その場合、 V_1 は様態を示せばよいわけで、 V_1V_2 型複合動詞による表現が日本語を豊かにしているといえる。

ここで1つの疑問は、なぜ

* He put the table with it.

とは言えないのか。また、次もどうしてか。

* He put the cup with the table.

* He put the table with the cup.

これは、putが、本来、移動・変化の部分に焦点を当てるものであると仮定すれば、移動物Oに対してOGOPの表出が望ましく、これに上記の例が反するからと考えられる。動詞の表す事象のあり方、捉え方が動詞によって様々あり、人間にとって便利な使い方で使用され则认为られるが、それらを分類・整理することは今後の課題としたい。人間は、1つの動詞に対して、その文を数回聞いただけで、その全体的事象や部分事象を捉える視点の置き方などを読み取ることができるものと推測される。そのためにも、同一のSVOPの形が逆にプラスに働くととも言えるだろう。

結論：SVOが様々な事象を表現する際の同一の文型であるのと同じように、SVOPも様々な事象を部分事象を盛り込んだ形で表現する際の同一の文型である。

(c) 日英語での差異：動詞と部分事象の順

次の文を見てみよう。

* 私は車をスーパーに運転した。

I drove my car to the supermarket. (筆者の作例)

私は車をスーパーに運転して行った。

I threw my bag to the car. (筆者の作例)

私はバッグをその車に投げたつけた。

The blast threw me clear of the oncoming cars.

突風に飛ばされて向かってくる車から逃れることができた。

上の例のように、日本語で「～を～に」の後に動詞がうまく対応しない場合でも、英語では同じ品詞構造で適格文になることが多い。このことは英語の文型や構文に比べ、「～を～に」が文型的に強くないことを物語るものである。英語では文型と動詞Vの意味からOPがGOの意味を持っているといえるが、それはOP部分事象の中でのPの前置詞とも関係している。上の日本語の例を適格文にするためには、日本語は1つの方法として様態を示す動詞と移動動詞を組み合わせた複合動詞をVとして使うことになる。英語では、文型の力により様態を示す動詞だけでも部分事象を続けることが可能であるが、日本語では文型の力が弱く、「～を～に」部分事象と様態動詞とが整合せず、様態動詞に補助動詞を付加して整合性を図るが、それは英語では動詞Vがその後の部分事象OPに作用し、その結果がOP部分となるなどして、OPの独立性が高いからと考えられる。部分事象の意味の確定には日英語共に動詞Vが必要であるが、その位置により、今述べたようなOPの違いが生じている、と考えられる。

(英) 全体事象決定 ---> 部分事象の追加：(部分事象の自由度大)

(日) 部分事象未決定 ---> 全体事象を動詞 V が決定：(部分事象の自由度小)

英語では動詞 V により全体事象が示され、その後で部分事象が提示されるのに対し、日本語では英語と出現順序が逆になり、文末でそれら 2 つが同時に確定される。このことが、日本語で複合動詞やサ変動詞の多用という現象に関係している、と考えられる。

部分事象を示す OP の内部語に着目すると、それは基本的には<主題、陳述>の順といってよい。すると日英語共に、主語に対する述部も目的語に対する述部も

主題 --- 陳述

の順で、日英語で全く同じ順であることが、OP がルート位置でありそれらが主張性を持っていることと合わせて注目されるべきである。このことは汎言語的に成立するようと思われる。ところが部分事象を示す塊 OP と V との位置関係が日英語で異なっていて、それは SVO、SOV の違いから来ている。O に対する叙述は O に近接して後続させなければならない、という原則を仮定すれば、必然的に SVOP、SOPV となることもこの原則が存在すると思われる。しかし、その検証は今後の課題として残る。

英語は文型の力が強く、文型の力を借りて部分事象が簡略に表現されている。日本語は、部分事象と整合する補助動詞を付加するなどの手段を用意している。英語は動詞が先に現れ、それに部分事象が付加的に述べられる形であるのに対し、日本語は部分事象が未確定の形で先に現れ、部分事象と全体事象を同時に確定する形で動詞が後に続く。それは正に係り結び的である。動詞は前の OP をまとめる働きをしているわけである。未確定状態の部分事象を 1 つの意味に確定するのに、文型を指定する力のある動詞が要求されるわけである。

日本語は部分事象を文脈に合わせて文頭に置くことができ、そのことは文脈の流れに OP を沿わせ易いという大きなメリットとなるが、その OP の意味の決定が文末の V の出現まで待たなければならない。英語は主語の後、すぐに V により全体的な事象描写が行われ、それに続いて部分事象が主張性を持って述べられる。英語では先に現れた全体事象に即して部分事象を解釈でき、全体-->部分の展開順となる。他方、日本語は部分-->全体の順であり、この点だけからは、部分事象の方が文脈に強く沿った内容の場合は日本語が有利となり、逆の場合は英語が有利になるといえる。しかし、日本語の場合、部分事象が未確定状態であることは文解釈の緊張を高めることに成り、一般に不利に働くといえる。

英語では OP 部分事象は動詞 V の影響の下で意味解釈されるが、この V の影響下での解釈ということが英語の受動文、中間構文などの構文の原動力になっている可能性がある。日本語 SOPV では部分事象と動詞との整合性が要求され、整合しない場合、複合動詞を利用して文型を作り上げている。これらのことが今回の部分事象分析から得られた成果と言える。

(d) 英語の二重目的語構文

He gave me a present.

彼は私に贈り物をくれた。

I'll give it to him.

彼にそれをあげます。

英語には二重目的語構文があり、そこでは間接目的語を主語の位置に移動する形の受動文も存在することから、やはり、特殊な文型と言えるのではないか。その構文に品詞的に 1 対 1 に対応する日本語訳がないことからそのことが伺える。2 つの授与構文に対して通常の日本語訳としては 2 つとも同じ訳を付けざるを得ないが、そしてそのことが原因と思われるが、間接目的語のほうも目的語として捉えなければならないのではないか、ということをこの部分事象の考察の中で気づいた。

Miss Nelson teaches five classes a day.

ネルソン先生は一日に 5 クラス授業をする。

日本人にとって、2 つの授与構文の情報構造の違いは容易に理解できるが、少なくとも筆者は同じように見ていたが、この考察から異なる構造と認識するに至った。この teach の例のように、動詞 V の作用を受ける場所(対象)が目的語 O になっても、日英語共に対格の認識である。そのことは日本語の訳に「を」が現れることから分かる。この構文は、部分事象分析の観点からは Oi が作用を受ける場所的なものであっても、Oi HAVE Od の関係であることが分かる。日本語においては、二重目的語構文に相当する構文がないことから、例えば give の 2 つの構文を同一視してしまうが、Oi HAVE Od を部分事象として見た場合、これは間接目的語 Oi の表す対象を中心にして、それに HAVE の関係が成立することを主張するもので、Oi HAVE Od

は結果状態を表している面が強いと結論付けられる。Provide A with B の部分事象 A BE with B も結果であるが、それとの比較で言えば、give の二重目的語構文の場合は所有(HAVE)、provide の場合は近接(BE with ～)の関係である。二重目的語構文は動作の結果を所有の概念で述べていると理解されることから、二重目的語構文はやはり特異な文ではあり（他にはないという意味で）、それは表現しようとする視点の置き方のようなものから来るものと考えられる。この場合も OiOd 部分は部分事象 OP として理解できるのではないか。間接目的語というのは、日本人にとって与格的（斜格的）に捉えられがちであるが（そしてその面もあるのだが）、文構造的には対格と捉えるべきと結論付けられる。

Miss Nelson teaches five classes a day.

ネルソン先生は一日に5クラス授業をする。

したがって、単文他動詞構文の構造としては SVO と SVOP の2つに絞り込める可能性がさらに高まる。主語 S が文全体の題目であることは日英語共通であるが、S に対する叙述部分の中の目的語 O のほうも部分事象の中では主題となっており、それに対する叙述がその後に続いている、という理解になる。目的語を文の主語の位置に据えた受動文、また、自動詞文の述部の中に、元の OP の P がそのまま現れていることは、そのことに気づいたとき驚きであったが、また、当然とも考えられるようになる。OP を主題化した形のものが受動文や自動詞文ということになるからである。

I gave him a book.

O HAVE (to) him

① I taught English to them.

② I taught them English.

間接目的語というのは、意味的な与格と構文的な対格を両方兼ね備えているといえる。上の②においては、「英語を彼らに一通りすべて教えた」という意味になるが、その点で①の意味と異なっている。日本語訳は間接目的語を完全に与格的に扱ってしまうが、間接目的語が与格的性格を持っているとしても、むしろ構文的には対格としての扱いであり、結果状態の所有関係と見るべきである。

[3] 部分事象を利用した応用表現

(a) 部分事象から見た日英語の受益構文、使役構文、受動構文

英語では、SVOP の構造で様々な意味を作り出していることがわかる。

S have OP

S put OP

S get OP

OP で表される部分事象を have, make, get と組み合わせる構成を取ることで、受益、使役、受動などの意味がコンパクトな形で表現されている。全体事象と OP 部分事象の関係が、単純な動詞によっても表示可能であることに驚かされる。被害の受動文といわれているものも存在し、まず、これについてみよう。

I had my wife killed in the accident.

私はその事故で妻に死なれた。

日本語の受動文と対応しているように見えるが、英語では OP で表される部分事象を主語 S が had(「持った」)という形で表現されている。被害が SVOP の簡潔な形式を用いて表現されていることが分かる。また、英語では別の形式として目的語 O の存在を前提とするが、それを表に出さない形の

You'd better get to sleep.

寝たほうがいいよ。

She has recently taken to glasses.

彼女は最近眼鏡をかけるようになった。

などの表現も発達させている。他動性を強く持ったこれらの動詞に対し、目的語として主語の再帰形が意味的な前提になっており、やはり SVOP を基にした表現方法の1つと考えられる。

Where did he get to?

彼はいったいどこへ行ったの。

日本語「～してもらう」、「～してやる」、「～される」、「～させる」なども同じようなことが言えるだろう。

私は彼に買い物に行ってもらった。

この例のように、これらの動詞は「～に」と共に出現することが多いが、その場合、「～して」の部分が「～することを」と考えれば、「～を～に」の部分事象と理解できる。「もらう」に対し、「～に」の与格（斜

格)がその主題としての目的語を要求しているからである。このことは、先に述べた斜格は直格名詞に対する叙述である、という一般的な前提から保証されると考える。歴史的な発達の経緯を筆者はまだ聞いたことはないが、逆にこれが1つの有力な説明になると考える。

使役の「～させる」については

(～に～させる) 彼にそこへ行かせる

(～を～させる) 彼をそこに行かせる

の2つの形があるが、「～を～に」部分事象分析を基にして、直前の「～してもらう」と同じように考えれば、「～に」の場合には「～を」が、「～を」の場合には「～に」が文の残りの中に存在するはずであり、それらがそれぞれ「そこへ行くことを」と「そこに行くことに」と考えると、これら両方の形が可能であることが分かる。やはり「～を～に」の部分事象を主語 S が生じさせるということで使役の意味が出現している。

英語の SVOP の受動文は

O BE V-ed P

となり、すでに述べたように、部分事象が主題化した骨格構造となっていることが分かる。逆に、この受動文では、主語 S (元の O) についての叙述がその後であり、P もその叙述の一部になっていることから、元の能動文の OP が部分事象であることを示す証拠と見ることもできる。英語の受動文は、元の文の部分事象を(全体事象と共に)主題化した形で述べる表現方法であるという認識が得られることになる。このように、日英語共に受益、使役、受動などの各構文に OP 部分事象が利用されていることが確認できた。

<「に」の性格>

「彼にボールをもらう」の「に」と「彼にボールを投げた」の「に」がそれぞれ起点と着点の両方の意味で使用されている。「～に～を」部分は同じでありながら、「に」格に2種類の用法があるように見えるもので、筆者が長く悩まされてきたものである。これについては、「に」が場所を示すことを第一義としていると見ればよいのではないかな。確かに、着点の用法が非常に多く、「に」が着点表示専用と考え易いことが原因かもしれないが、起点表現として「から」と共存していることは「に」が話者中心の主観的表現となっている、と考えられる。主観的表現というのは、話者を中心とした場合にのみ許される捉え方という意味である。こうすると、「もらう」に対する移動物の起点に「に」が使用されることに対しては、「から」が客観的かつ論理的であり、しかもそれが使用可能であるのに、なぜ「に」が使われるのか。「に」が単に点としての場所を示すものと考えれば、起点のところに現れても不思議ではなく、「に」の起点の用法は、話者を中心とした主観的授受表現にのみ出現することに限定されていて、「もらう」「あげる」が話者中心の動詞であり、しかも、これらの動詞自身がそれぞれ話者へ向かう方向、話者から離れる方向を意味として備えているから、「～を～に」は同じであって構わない、ということになる。主観的表現においては、話者と異なる場所を話者のところから区別しさえすればよい、ということではないかな。一種の言葉の経済の一面と考えられる。「に」が自分の所とは異なる所という意味で使用され、起点を専用的に表す客観的な「～から」との棲み分けする形で使用されていると結論付けられる。

<STRIKE 文>

英語は、1つの動詞に対してさえ、構造(文型)的にさまざまな使い方を出現させる。次も筆者が悩まされてきた形である。

She struck him in the face with her open hand.

彼女は平手で彼の顔をぶった。

She struck (him in the face). 大きな場所、小さな場所(塊形成なし)

She struck him in his face.

(her hand) (him, the face, in the face)

これは provide A with B などとは構成原理が異なることは、him が移動物でないし、him と in the face が結び付かないことから分かる。Him と in the face は GO, BE, HAVE のいずれによっても結合させることはできない。したがって、in the face は struck を修飾する副詞的な働きと考えなければならないだろう。そのことは、in the face と the を使用するのが正用法ということと関係していると思われる。具体的な指示可能な対象としての his face ではないからである。しかし、

She's out in the garden.

庭に出ている。

と同じではないかとも思われる。目的語 him のところが広い場所で、in the garden が狭い場所であるから、上の例文は、次の2つの文の重ね合わせかもしれない。

She struck him.

She struck in his face.

いずれにせよ、この文型は OP が関係している文ではない、と結論でけられる。この strike 文は SVOP 構造と見るべきではなかろう。

(b) 知覚構文、使役構文 2 (不定詞、φ)

次の2つの文型は、動詞に対する目的格が同一であり、him の後の to がある場合とない場合の OP の違いは何であろうか。

tell him to do (O BE P)

make him do well (O P)

tell の場合は OP 部分は動詞 V が示す時に対して未来志向であり、make の場合には動詞 V が示す時に対して同時である、と考えられないか。To が方向を示す前置詞であることから、to の有無が関係しているのでそのように考えられる。そのことと関係して、make の場合 OP 全体 (部分事象全体) が make の作用を受けるもの、という側面が強く、この点で上の2つは異なっていると考えられる。

目的語の後の to がない不定詞が来る場合、不定詞は名詞である。すると SVOO と同じ文型と見てもでき、この点から OP を見直すと "(him) HAVE (do well)" と考えられ、これは目的語 O へ焦点を当てた結果状態を示す表現方法ということを示している。Tell や cause の場合には to が現れ、その場合は OP が (これからの) 目標を表していると考えられる。これらのことから、次のようにまとめられる

make him do well OP --- OφP または O HAVE P

see him crossing the road OP --- O BE P

tell him to do 上と同じ

このように考えてきたものの、正直なところ、筆者はこれらのニュアンスを英文にはっきりと感じられるわけではない。これも今後の課題である。

それに対し日本語は、英語の手法を取らず、受動、使役などを「られ」、「させ」などの補助動詞とそれに対応する項(「を」格名詞、「に」格名詞)を使って文型を形成し、全体事象の表示の中心になる動詞 V には文型に関与させず、様態だけを表現させるようにしている。所謂複合動詞を使用している。英語では文型・構文に頼る形で動詞を様態化させて使用している。従って、手法は異なるけれども、動詞の文型・構文的なもの部分を伏せる形で様態化して動詞を使っている、この様態化して使うということが日英両言語で多用されている重要な表現手段になっていると考えられる。

(c) 日本語の感覚・感情動詞構文

次の例文を比べてみよう。筆者の作例であるが、いずれも日本語として適格文であると判断できる。

私は試験を心配に思っている。 SOPV

彼は試験を心配に思っている。 SOPV

(私は) 試験が心配だ。 OP(V) (O=S)

私はそのことを嬉しく思った。 SOPV

彼はそのことを嬉しく思った。 SOPV

(私は) そのことが嬉しい。 OP(V) (O=S)

これらの例で、部分事象に着目すると、自動詞文が他動詞文から部分事象のところを取り出す形で存在している。筆者は、このような自動詞文 OP(V)をずっと話者中心の表現、話者だけに許される主観的な特殊文と考えてきた。話者自身の気持ちを表すときだけに使用できる文で、第3者に対する客観的な表現は1人称の表現を元に、話者が自分を他人の身に置く形の表現に変換し上記のような表現が出現する、と考えていた。つまり、1人称を中心とした表現が元があり、それを第3者に話者が身を置くことによって客観的表現が構成されているものと考えていた。これで筆者は問題を全く感じてこなかったが、ここでの部分事象に着目した分析を当てはめて考えてみると次の新しい発見に至った。それは、上記の例文がすべての人称に対し同一の SOPV (汎用) 文型である、ということである。そうすると、一人称の話者中心の感覚・感情表現と思っていたものが、実は SOPV の部分事象 OP の主題化に過ぎない、即ち一人称のときの「私は」...「思った」が省略されているに過ぎない、とも考えられることが分かった。一人称主語のときに限って、主語などが省

略されているだけのことである。このように、特殊と見えた日本語感覚・感情表現がすべての人称に亘って整然と同一の文型を元に理解できることは筆者には大きな驚きである。このことの理解に関し、どちらが正しいのか、やはり歴史的な経緯も見てみる必要があり、今後の課題としたい。

(d) 他動詞と同形の自動詞、中間構文

受動文は、対応する能動文の目的語が主語の位置に移動した形であり、動詞の形態も変わるけれども、動詞の後の要素はそのまま残る。元の文での O が文の題目(S)として先頭に、そしてその叙述(P)が後ろに残る。したがって、受動文は OP 部分事象を全体事象として主題化して述べる形といえるだろう。また、英語において、SVOP とその OP から成る OV₂P (O=S) とで V が同じ形態で現れる場合があるが、これはかつて能格的現象と呼ばれたことがある。日英語においては、通常 V₂ は受動態になるが、また、動詞によっては同じ形態で現れることも指摘されてきた。

英語: open (日本語: 開く)

H opened the door. The door opened.

日本語: 開いた、開いた (* 彼はドアを開いた)

一般には

He sold the car to me. (SVOP 文)

*The car sold to me.

The car was sold to me. (SVOP 受動文)

従って、SVOP に対する OP 部分の主題化において受動態がすべての場合に適用できる手法であるが、同形の V が対応する場合がある。この例外に当たる後者の手法は、各事象に対する人間の側からの捉え方の違いや便利さといったことの反映といっているであろう。しかし、注目すべきは、OP がそのまま主述の関係で自動詞文にも現れていることである。SVP の文型の力により、V は自動詞的な解釈の力が作用し、このことが定着している場合もあろうが、いずれにせよ、そうでない場合は

S BE+V-ed P

の受動の形となる。BE が文型的機能を発揮し、V-ed が過去分詞で様態化されていると考えられる。

従って、次は実際に使用される文であるが、その存在理由が求められる。

The book sells well. (中間構文)

動詞 sell の場合、人を主語とした動作主が主語で使用される性格が非常に強い動詞であると考えられるが、上記の使い方があり、また、次のような例も存在する。

Eggs used to sell at sixty cents a dozen.

The concert tickets sold badly.

これらは他動詞が自動詞的に使用される文で、中間構文と呼ばれている。これらに対応する他動詞文は次のようになる。

They used to sell eggs at sixty cents a dozen.

They sold the concert tickets badly.

ここで、SVOP、SVOφ (P=φ) の OP 部分は V の作用を受ける部分で、OP は他動詞 V の影響を受ける。この OP が主題化された受動文は

Eggs (used to) BE sold at ...

で、これは論理的であって、過去の状態を示す通常の文である。OP に対し、これが V の作用を明示するため、自動詞の文型の中に sell が入れられていると考えられる。

Eggs (used to) sell at ...

これは、sell の能動文から OP を取り出し、OP が動詞 V から受けていたその作用をそのまま引き継ぐ形の文であると考えられるのではないか。"be sold" の形を使って受動態とすれば問題ないが、あえて sell にして、人が sell するということと Eggs BE sold at ... (OP) が同時に示されると言ってもよからう。したがって、中間構文というのは OP 部分事象が取り立てられたもので、それが V(sell) の作用領域に入っていることを示すために O sell P の構造になっていると理解できる。「O BE P」構造の BE の位置に強引に V が押し込まれ、V が様態化していると言ってもよからう。このように受動態のほかにも中間構文が存在するが、その存在理由は、受構文が現象を出来事として述べる現象記述文であるのに対し、中間構文はあくまで主語 S の性質、性格のようなものを述べる特性描写文として位置づけられるところにあると言える。この棲み分けにより、中間構

文にも存在意義があることが分かる。

受動文は OP 部分事象を元にしていて、動詞は「be 動詞+V-ed 様態動詞」である。それに比べると、中間構文のほうは OP 的な性格の強く残る文と見ることはできるのではないか。それは「O 様態動詞 P」の形で BE が表に出てこないことから来るものである。Sell という動詞の通常用法を無視して様態表示的に使っているところに、SVOP の前提を想起させるものとなっているのだろう。したがって、中間構文というものが、OP 部分事象の切り出しで、主題化表現の一種ではないか、という結論に至る。そして、中間構文は単なる出来事の描写ではなく、ものの特性的なものを描写するものであり、驚きといったニュアンスで使われる簡潔な文である、という点で存在意義を持っている。その原因が、上述のように、部分事象の考察から説明できたと考えられる。

まとめると、受動文が能動文の OP 部分事象を基にしているのと同じように、中間構文も能動文の OP 部分事象を元にしたものといえる。他動性が強く認識される事象を記述する場合、この中間構文を使わなければ、現象文となって出来事の経過や変化の描写になってしまう。驚きの話者評価を付け加えるにはさらに語を補わなければならないが、それが中間構文を使えば簡単に生き生きと表現できる利点が生まれる。

(e) サ変動詞、英語の構文（文型）と日本語の複合動詞

<サ変動詞>

サ変動詞「～する」は「する」が補助動詞として働き、これが「～を～に」の OP 部分事象と結び付く。「する」が正に英語の SVOP 文型に匹敵する構造を作り出す。つまり、「する」、「させる」などが日本語の文型 SVOP を作り出す 1 つの重要な手段となっているといえる。それらの補助動詞が部分事象に対応していて、補助動詞の直前に位置する動詞は、様態を述べることに専念する形になる、言い換えれば、様態化される。英語において、文型が動詞 V のスロットに作用し、そこに入る動詞が様態化されるのと同じことである。

日本語で、例えば「wipe する」というのは、完全に定着している日本語とは言えないが、理解に問題はなく、臨時的な使い方としては全く問題なく、この形は造語力が極めて高いことが大きな特徴である。考えてみれば、「勉強する」なども同じ経過を辿り定着したものである。従って、「～を～に wipe する」といえば「～を～に」を部分事象として含む全体事象において wipe という動作で存在することを示している。これにより、「ぬぐう」では対応できない wipe の文も日本語訳が簡単にできることになる。例えば

手を額の上に wipe した。

で、何とか

He wiped his hand across his forehead.

彼は手で額（の汗）をぬぐった。

の意味を表すことができる。「～する」を使えば、それが「～を～に」の部分事象に対応するが、それは「する」の構文の力を利用しているのである。「～する」の「～」部分は様態表示になっていて、英語動詞の用法をかなりの程度カバーできるのではないか、と思われる（結果用法は苦しい）。これは筆者にとって新しい知見である。さらにサ変動詞の歴史などを見る必要性もあろうが、結局「～する」に「～を～に」と整合する要素が含まれていても、それがこの「～する」で文型を決定している。筆者がこれまで無意識に使用してきたこの形の原理が今やっと理解できたことになる。複合動詞にも同じ原理が働いている場合が多い。V₁V₂ の V₂ が文型を決定するように働き、V₁ が様態を示している。次にその例を示しておく。

搾り出す、取り出す、掻き込む、投げ込む

日本語を母語とする者からすれば、日本語には対応する単文形式がないためか、あるタイプの英文に違和感を覚えることが多い。

He wiped his hand across his forehead.

Sheep provide us with wool.

The shock robbed him of speech.

Wipe の目的語で言えば、S wiped O の段階で O の意味役割は場所と移動物の可能性が高いが、日本語でも「ぬぐう」に場所と移動物の O を続けることができると同じである。しかし、英語では先に述べたように、その後に来る P の要素によってさらに広い用法を持つことになる。

He wiped his hand across his forehead.

従って、この構文的な側面から、日本語は O の意味役割の幅が狭いことが一般的に言えることが分かる。日本語は単独の O と OP の O とが V から見て同じ意味役割を持っている傾向性が強い一方、英語では、O は

動詞 V に対して被動作主としての意味役割を共通に持つてはいるが、O と P との関係を重視することから来るのか、V に対して日本語よりさらに広い意味関係を O に許容していると言える。その 1 つが上の wipe の例である。

英語では P が現れた後で部分事象の中での O の役割が決定される。日本語でもこのことは起こるが、その決定には最後に現れる動詞 V を待たなければならない。

私は彼を山田さんと思った。

私は彼を思った。(上とは別の意味)

筆者の経験からすれば、この状況は英語のほうが圧倒的に多い。Wipe や provide と日本語の対応する動詞に関してもそのことが当てはまるが、この違いが何から生じるのか、という疑問が残る。筆者の結論を言えば、OP と V の相対的位置関係からの違いが原因になっている。英語が全体事象 V の作用の下に部分事象が記述されるのに対し、日本語は O の V に対する意味役割と O の P に対する意味役割が文末の V で同時に決定されることになるからこの違いが生じる、と考えられる。日本語は、時間的な差がないので許容度が小さくなる。結果を示す open の付加された次の文もそのように理解できる典型的な例である(対応する単文形式の日本語はない)。

He kicked the gate open.

門をけてあげた。

OP が動詞 V の前か後かの違いに起因するとしか考えようがないが、この原因は SVO と SOV の違いから来るものである。

<日本語の「させる」と「に」>

日本語には、よく似た次の 2 つの文がある。

彼にそこへ行かせた。

彼をそこに行かせた。

前者では、彼が「そこに行く」ことに対する意思を持っていて、それを許した、のような意味である。これらの OP は「～を～に」の存在を仮定すればそれぞれ

そこへ行くことを彼に --- O GO P

彼をそこに --- O GO P

となり、前者では O が「そこへ行くことを」で O GO P となり、選択的な意味が出ることから、これらの文の違いが説明できると考える。

参考文献

- 1) 新英和大辞典 第六版 2011 年 研究社
- 2) リーダーズ英和辞典第 2 版 2008 年 研究社
- 3) ランダムハウス英和大辞典第 2 版 1994 年 小学館

Structural Analysis of Simple Sentences in English and Japanese From the Perspective of the Partial Event

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2014; accepted November 6, 2014)

The SVOP sentence structure in English (SOPV in Japanese) contains OP, which functions to depict a partial event within the whole event shown by the whole sentence. We will see that O acts as the subject in the OP event and that this OP is used importantly to create passive, causative and beneficial sentence constructions and, therefore, must be understood as a key element in the analysis of sentences in English and Japanese.